

狂言の絵画資料の収集—その5

—狂言古図の有力な一群について—

藤 岡 道 子

はじめに

狂言の古図についてこれまで10年余の探索と考察を踏まえ、古図の中でも有力な一群について取り上げ概観することが本稿の主題である。「有力な一群」の有力とは演出資料として利用価値が高い、というほどの意味である。

近世期の狂言の絵画にはおおよそ2系統あると考えてよいと思う。第1は著名な絵師による美術作品としての狂言絵画である。近世期、絵師が筆者名を入れて作品を書き出すのは当時爆発的にさかんになった浮世絵の世界、また風俗画の世界においてである。17世紀後半の菱川師宣、鳥居清信は作品に署名をし、以後多くの絵師も倣ってゆく。狩野派、土佐派、住吉派などの上層階級用命の絵画制作者も近世前期から署名をするようになっていく。狂言絵画においては管見では最も早い例では英一蝶(1652～1724)の作品がある¹⁾。また江戸中期の制作かとされる柳営御物「能狂言絵巻」(東京国立博物館蔵)には署名は無いが住吉派の絵師の作品とされている。その他、丸山派の絵師、福王雪岑、葛飾北斎、英派の絵師等が署名入りで狂言(見立や、狂言種も含む)の作品を残している。これらは(刷物以外)上層階級や富裕層からの特注品で、一点物、美しく装丁された美術調度である。これらの狂言絵画が制作当時の実際の狂言の実態をどこまで正確に伝えるかについては、次のように考えられる。まずこれら絵画の鑑賞

1) 拙稿「英一蝶の描いた狂言」聖母女学院短大研究紀要33(平成15.3)

者が狂言をよく知る階層の人々であることから、絵師もまた狂言の知識がなくては描けなかったはずで、その意味で当時の実写、とはいえないまでも狂言について恣意的な描写をしてはいないとしてよいと思う。ただし、床掛けや屏風、襖絵とするための、ある程度の装飾品としての工夫が入ることはあったであろう。例えば江戸後期の土佐光孚（1780～1852）筆の現在生駒市宝山寺獅子閣の襖絵となっている作品にはそうした工夫の跡が見える²⁾。このような例から、当時の狂言の演出資料としては、1点ずつ、資料的確度に相当の配慮をして扱わねばならない。

第2はまさに狂言の古図というにふさわしい古態を示す作品群である。描かれた内容のほか、用紙、描法も古態で、その点からも江戸前期（初期、とも言うる作品も含む）の制作であると言われてきたこと³⁾は、あながちまちがいはないと思う。これらの作品はほとんどが筆者や伝来が不詳である。現在知られているこれら作品は、美術館等の図録や古物売立目録などで確認され、その現況は、画帖や屏風貼絵、また単体（メクリ）の形状で残存する。本稿では先行研究を踏まえこれまで収集した狂言古図の情報の中から、とりわけ古く、かつ一群（すなわち同系統）の作品と考えられるものについて取り上げていきたいと思う。近世の狂言古図についてはすでに拙稿「描かれた狂言—近世狂言絵画の諸例を見わたす」⁴⁾において、先行研究と当時までに収集した情報は記したが、その後の収集情報を加え、そこで行わなかったこれら諸作品相互の関係と各作品の資料的意義に立ち入ってここでは考察を加えたい。本稿での「有力な一群」とは近世（ことに初期・前期）の狂言の様態をビジュアルに描き出してくれるこの第2の作品群を指している。

2) 拙稿「土佐光孚の狂言絵」聖母女学院短大研究紀要29（平成12.3）

3) 「国立能楽堂収蔵資料図録」（平成13.3）解説等

4) 拙稿「描かれた狂言—近世狂言絵画の諸例を見わたす」聖母女学院短大研究紀要30（平成13.3）

狂言古図 8 件の抽出と考察

まず、前稿「描かれた狂言—近世狂言絵画の諸例を見わたす」（以下「描かれた狂言」と略す）に重なるところもあるが、この第2の作品群で今日までに知り得た全作品を列挙する。

- ① 「山脇流」(徳川美術館蔵)現状：画帖 3 冊 全160曲 (未公刊)
- ② 『狂言集成』所収図 全44曲 (能楽書林 昭和49年1974刊)
- ③ 「狂言古図」(国立能楽堂蔵)現状：画帖 1 冊 全16図 (「国立能楽堂収蔵資料図録 I」に全図所収)
- ④ 「狂言画集」(個人蔵) 現状：画帖 1 冊 全25図 (拙稿「新出『狂言画集』の紹介と考察」⁵⁾ に全図所収)
- ⑤ 「狂言古画帖」(国立能楽堂蔵) 現状：画帖 1 冊 全13図 (「国立能楽堂収蔵資料図録 I」に全図所収)
- ⑥ 「狂言古図貼交屏風」(早稲田大学演劇博物館蔵) 現状：屏風・4 曲 1 隻 全12図 (林和利「演博蔵『狂言古図貼交屏風』の素性と価値」⁶⁾ に全図所収)
- ⑦ 「狂言画卷」(法政大学能楽研究所蔵) 現状：卷子 全40図 (拙稿「鴻山文庫旧蔵『狂言画卷』と『能狂言画鑑』」⁷⁾ に全図所収)
- ⑧ 「狂言尽絵巻」(国立能楽堂蔵)現状：卷子 全 8 図 (「国立能楽堂収蔵資料図録 I」に全図所収)

これら作品の名称は現所蔵機関における通称である。もとより収載の狂言図そのものが制作当初よりその名で呼ばれていたわけではない。

これら作品のうち、①、②、③、⑤については拙稿「描かれた狂言」に書誌、

-
- 5) 聖母女学院短大研究紀要34 (平成17.3)
 - 6) 早稲田大学演劇博物館研究紀要『演劇研究』20 (平成9.3)
 - 7) 拙稿「鴻山文庫旧蔵『狂言図巻』と『能狂言画鑑』」聖母女学院短大研究紀要33 (平成16.3) …「鴻山文庫旧蔵」は「鴻山文庫蔵」の誤りであった。「能楽研究」法政大学能楽研究所研究紀要32 (平成20.3) において指摘あり。ここに訂正しておきたい。

伝来等について考察を記したので本稿では略し、④、⑥、⑦、⑧について略述したいと思う。⑤については少し現在の知見を付け加える。

④については拙稿「新出『狂言画集』の紹介と考察」に書誌と伝来、素性について記した。④はもと②、③と一群の作品としてあったもので、その所蔵者も3代前までは確認できる。すなわち②、③、④はもと黒木勘蔵(1882～1930)所蔵、ついで笹野堅(1901～1961)所蔵、ついで江島伊兵衛(1895～1975)の所蔵となり、江島伊兵衛から一部分が③として古川久(1909～1994)に、また別の一部分が④として同じように誰かに贈られ、④は後に市場に出て京都市の古書肆キクオ書店に入り、その後個人蔵となった(2001)。黒木勘蔵はこの一群の狂言図を、早大教授で近世音楽・演劇の研究者である立場から近世演劇絵画資料の一環として収集したものかと考えられるが、今のところ入手動機や経路については確認できていない。近世演劇・狂言の研究者である笹野堅に渡った事情も確認できない。さらに笹野堅が手放した理由も未確認である。江島伊兵衛が購入(昭和31年1956頃)した事情については『能楽研究』(法政大学能楽研究所研究紀要)第5号(昭和55.11)の古川久「狂言古図解説」に詳しく(p.91～104)、また拙稿でも触れている。

江島伊兵衛に帰したときのこの狂言図の総量が何点であったかについては古川久も次のように記し、不明としている。すなわち

「なお、『狂言古図』ともと一群で江島氏の蔵架(鴻山文庫)に帰したものの、すなわち黒木氏旧蔵本の本体の分は、江島氏の在世中には精査の機を得なかった。氏の没後に鴻山文庫は能楽研究所に寄贈されたが、すでに移管された中には同図は含まれていない。」

とある(同論文p.95～96)。総量は不明ながら②、③、④によって今日目にすることができるのは全部で②の44図、③の16図、④の25図である。この44図、16図、25図の曲名については本稿末尾の「狂言図比較表」を参照いただきたい。②と③、②と④の図は当然重複するはずである(たとえば、「千鳥」という曲、「千切木」という曲が②と③、②と④にある場合、同じ図であるはずである)がそうでな

いのは、この狂言図一群は1曲が1図しかなかったのではなく、1曲が類図で複数、また同曲異図で複数混じっていたからである。たとえば「鎌腹」、「千切木」では②と③は衣服の紋様がやや違いながらも同図、「鈍太郎」では②と④は別図、つまり1曲に別場面を描く2枚の図(手車の場面の図と3人の男女の愁嘆の場面の図)が存在したのである。

④には既に拙稿で紹介したところだが伝来を示す紙片が付帯していた。それによるとこの25図の狂言図は「長州公の江戸砂村下屋敷を松平家が譲り受けたとき、建具類の修繕をして張替えで不用になったもので、当時の係役だった上田の先祖が拝領したもの」だという。これがいつのできごとであったかについては現在確認できておらず、上田についても不明のままである。この紙片がいつ書かれたものかも不明である。しかしこの伝承はこれらの狂言図の伝来に関しての示唆とともに、これらが襖か屏風に貼られていたことを示しており、剥がされて単体(メクリ)の状況にあったということは信じてよいところかと思う。

⑤については非常に興味深い図(「大小」ほか)が中に含まれており、特異な画帖と判断したために、拙稿「描かれた狂言」では②、③、④と一群とは考えなかったが、②、と類図を含み(「酢薑」、画面法量も近いので、やはり一群であった、と考えるべきかと今は思う。江島伊兵衛購入以後に流出したとは考えられないので、それ以前に流出し、(流出後に画帖に仕立てられ?)市場に出たものと考えておく。

⑥については『演劇研究』第20号に林和利の論考がある。その「演博蔵『狂言古図』貼交屏風の素性と価値」の狂言図の成立年代および価値の考察には従うべきかと思われる。曲名比定にも賛成であるが最後の不明とする曲は「痺」であると断定できるので、本稿末尾の表にはそのように扱った。この屏風の狂言図は②、③、④とは内容の古態、また人物の動態表現で相違があり類図を含みながらも、もと一群であったかどうか判断がつかない。しかし、②、③にはあきらかに別の絵師によって描かれたと判断される図が混在し、④も拙稿で考

察したように足袋の描きかたなどに②、③との相違があるので、②、③、④の一群、つまり江島伊兵衛購入本にはすくなくとも四系統の狂言図が混在してあったと判断されるので、この演博蔵本もまた②、③、④と類図を含むことから、②、③、④の一群であったが、江島伊兵衛購入以前に流出し、屏風装になって演劇博物館に購入された、という経路も考えられる。

⑦については先の古川久「狂言古図解説」中に〔追記〕として解説があり、②「狂言古図」との影響関係が示唆されている。⑦は文久3年1863の書写奥書があるものだが、この原本にあたる1本に遭遇したのでそのことを含めた考察を拙稿「鴻山文庫旧蔵『狂言画卷』と『能狂言画鑑』」にまとめた。「能狂言画鑑」は京都市の古書肆から高額で売立に出た、大名調度と思しい重厚な手鑑で、60の狂言図を所収するが「狂言画卷」はその忠実な抄出転写本（40曲所収）であることがわかったのである。「能狂言画鑑」は個人蔵となって現在は閲覧不能なので「狂言画卷」によって内容の検討をするほかはない。

⑦に②、③、④と類図があることは本稿末尾の表にある通りだが、類図以外は描き方の違っていても多いので、一群のものであった、というより影響関係があった、と考えておきたい。つまり、②、③、④の狂言図の絵師と「狂言画卷」原本の「能狂言画鑑」の絵師は影響しあえる近いところにいた可能性がある、ということである。

「能狂言画鑑」表紙題箋には「土佐光成筆」とあり、その信憑性については今確証を得ていないが、格調高い装丁、品のある人物描写、画材の高級さ、などから土佐光成（1647～1710）の関与を諾わせる作品ではある。

⑧は筆者、成立年不明ながら画面の新しさや画風等から「国立能楽堂収蔵資料図録」の解説にあるように江戸後期成立の絵巻としてよいであろう。この作品の注目すべきところは、8図中6図が②、③、④図の類図であることである。⑧が②、③、④（かその祖本）を下敷きにして描かれた狂言図である、ということになると、⑧のみにある「仁王」図も江戸前期の図であると判断できること

になる。江戸後期の作品であっても内容は江戸前期に遡らせ得ると判断されるわけで、江戸前期の演出資料としての利用ができる、ということになる。②、③、④と異なる「夷毘沙門」図も、江戸前期にこのような異演出があったと読むことが可能になるわけである。

さて最後に①について述べたい。その書誌・伝来については「描かれた狂言」に詳述したので略し、本稿では①と②、③、④、⑤、⑥との関係について考察する。本稿末尾の表によって明らかなように、①と②～⑥には多くの同類と認められる図が存在する。①と②～⑥には確実に書写の親子または兄弟関係がある。①と②～⑥はどちらが先行するかについては次のように考えておきたい。

①はみな同筆で、同画材をもって描かれていて②～⑥のように幾系統が混在した狂言図群でない点から、また②～⑥と比べ整然とした人物表現から、②～⑥よりも後代に②～⑥を粉本として、あるいは②～⑥の粉本と同じ狂言図を粉本として用いて②～⑥より後代に描かれた作品群である、と考えておきたい。その際、絵柄の混在した狂言図群の中から一系統の図群を選び出して描いて画帖を制作したため、統一的な整然とした内容になったものであろう。

その①を本稿末尾の表の第1番目に置いたのは①が現在知りうる狂言図のまとまりの中で最も多くの曲を所収しているからである。50音順に曲を列挙したこの表に、これからも出現するであろう新資料を加えていくことで、近世前期の狂言古図の総覧は完成に近づくであろう。

さて、①は徳川美術館の所蔵で、未公開である。同館図録等に掲載されて、外部の者が目にするのができるのは10図に満たない。よって現在、狂言の古図を検索したいときは同館図録等に掲載の曲以外はすべて②～⑧によらねばならないことを書き添えておく。

以上、狂言古図の有力な一群につき述べたが、近年、3件の有力な資料に出会う機会を得た。2件は個人蔵、1件は在外である。公刊には時間がかかりそうであるが、本稿でまとめた表を補填しうる内容のものであったことは報告し

ておきたいと思う。①～⑧の一群に収まる資料であったので、公刊をここに切望しておきたい。

最後に近世前期の狂言を描く絵画に都市景観図や邸内遊楽図、およびそこから派生したと考えられる観客とともに描かれる狂言舞台図、そして「狂言記」挿絵があることを付記しておく。これらについてはいくつかの拙稿でも触れてきたが、本稿での「有力な狂言図」の一群とともにそれぞれ資料批判を加えたのちにあわせて利用していくべきものと思う。

付1：本稿は本年、2012年2月の六麓会（関西能狂言研究会）例会での口頭発表をもとに記述したものである。末尾に記した、新資料のひとつが意外に早く公開されることとなり、本稿の表がいよいよ充実したものになることとなった。ただしその新資料の収載曲数は110の多きに上り、内容的にも考察批判を加えねばならぬ現段階にあるので、この新資料については次の課題としたい。すなわちこの新資料そして他にも見出した新資料を含めて「狂言古図の有力な一群について」の稿の続編と表の追加が今用意されつつあることを記して本稿を閉じたい。

付2：本稿は日本学術振興会科学研究費（挑戦的萌芽研究）の助成を受けて成ったものである。JSPS KAKENHI Grant Number 23652056

(56)

狂言古図比較表	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
山脇流曲名〈 〉 は他本曲名	山脇流	狂言集成	狂言古図	狂言画集	狂言古画帖	演博屏風	狂言画卷	狂言尽絵巻
あ								
1 あかがり	下33							
2 悪太郎	下20							
3 悪坊	中46							類図
4 朝比奈	中25	類図		類図(小異)		類図(小異)		
5 麻生	上2							
6 合わせ柿	下51							
7 栗田口	上35							
い								
1 居杭	上51	非類図			非類図			
2 因幡堂	下39	誤(鷲図)						
3 犬山伏	中36	非類図						
4 今参	上36							
5 伊文字	中23	類図(注)						
6 いろは	下25		非類図					
7 入間川	上37							
う								
1 内沙汰	中12							
2 靱猿	上40	非類図						
3 瓜盗人	中45	類図						
4 〈牛盗人〉		〈牛盗人〉						
え								
1 夷毘沙門	上3	類図		類図				非類図
2 夷大黒	上16							
3 〈餌差十王 : 古図〉			〈ゑさし〉					
お								
1 岡太夫	上12							
2 鬼瓦	下23	類図		類図				
3 鬼の継子	中32	類図					類図	
4 伯母ヶ酒	中33	類図						
5 お冷やし	中54							
6 音曲響	上30							

7 女山立(別名 金藤左衛 門・瘦松)	下 54	類図					
か							
1 懐中髯	上 31						
2 鏡男	下 41						
3 柿山伏	中 42						
4 隠笠	上 25						
5 蚊相撲	上 46						
6 金津地蔵	中 21				類図		類図
7 蟹山伏	中 48						
8 鐘の音	下 28						
9 鎌腹	下 37	類図	類図				
10 雷	中 35						
11 雁かりがね	上 18						
12 雁磔	下 22			類図			
13 雁盗人(雁大名)	上 49					類図	
14 〈隠狸〉			〈隠狸〉				
き							
1 不聞座頭	下 9	非類図					
2 狐塚	下 26					類図	
3 牛馬	上 33						
4 禁野	下 21						
く							
1 口真似	中 52			非類図			
2 くじ罪人	中 27						
3 首引	中 31						
4 鞍馬参	上 34						
5 栗焼	下 53		類図				
け							
1 鶏流	下 31						
こ							
1 柑子	下 27						
2 膏葉練	上 21	下 5 (小異ア ル二図)				類図。 下 5 デ ハ歌争 トスル	
3 腰折	下 6	類図					

(58)

4 子盗人	中 6						
5 昆布売	中15						
6 昆布柿	上28						
さ							
1 さいの目	上10						
2 さざえ	下 8						
3 察化	下16						
4 薩摩守	中 7			類図			
5 猿座頭	下10						
6 三人片輪	中41						
7 (三人夫)	上26						
8 三本柱	上22						
9 〈鷲〉		因幡堂ト シテ鷲図	〈鷲〉				
10 〈左近三郎〉			〈左近三郎〉				
し							
1 磁石	中 1		類図				
2 二千石	上41		非類図				
3 地藏舞	中19						
4 止動方角	中11	類図					
5 痺	中24					非類図	
6 清水	中34	類図	類図				
7 秀句傘	上39						
8 宗論	中 5	類図	類図			非類図	
9 真奪	下17						
す							
1 末広	上 7						類図
2 素襖落	中13			類図			
3 酢はじかみ	下45	類図			類図		
4 墨塗	上48	非類図					
5 〈鱸包丁〉			鱸包丁				
せ							
1 政頼	中29						
2 節分	中28						
3 煎物	上 6					非類図	

そ							
1 宗八	下 52				類図		
2 空腕	下 35						
た							
1 大黒連歌	上 18						
2 宝の槌	上 24						
3 竹の子	下 49						
4 太刀奪	下 55						
5 〈大小〉					〈大小〉		
6 〈大般若〉			〈大般若〉				〈大般若〉
7 〈樽掣〉				〈樽掣〉			
ち							
1 千切木	中 47	類図(逆)					
2 竹生鳥參	下 24		非類図				
3 千鳥	下 47	類図		非類図			
4 茶壺	上 53			類図(小異)			
5 〈茶子味梅〉		〈茶子味梅〉					
つ							
1 通円	上 42	類図					
2 筑紫の奥	上 29						
3 釣狐	上 3						
4 〈菴山伏〉					〈菴山伏〉		
と							
1 唐人相撲	上 13						
2 飛越	中 18						
3 土筆(別名歌争)	下 48				類図		
4 どぶかっちり	下 12	類図					
5 どもり	下 36						
6 鈍太郎	下 1	類図		非類図			
な							
1 長光	下 3			類図			
2 名取川	中 20	非類図 (近い)					
3 鍋八撥	上 5	類図					
4 成上り	下 42			類			
5 縄縷	下 43						
6 〈鳴子〉		〈鳴子〉					

(60)

7〈鳴子遣子〉				〈鳴子遣子〉				
に								
1 鶏聲	上19			類図				
2 若市	中50							
3〈仁王〉								〈仁王〉
ぬ								
1 抜殻	中30		類図					類図
2 塗師平六	下7							
ね								
1 禰宜山伏	中37			類図				
は								
1 萩大名	上47			類図				類図(小異)
2 伯養	下11	類図						
3 八句連歌	中2							
4 花争い	下29							
5 花折	下14					非類図		
6 花子	中2	類図						類図
7 鼻取相撲	上38	非類					類図	
8 腹不立	中14							
9〈張蛸〉								〈張蛸〉
10〈半銭〉			〈半銭〉					
ひ								
1 比丘貞	中10			類図				
2 髭櫓		非類図						
3 毘沙門連歌	上8							
4 引括り	下40							
5 人を馬	上52			類図(小異)				
ふ								
1 武悪	上44							
2 福の神	上15							
3 梟	中43							
4 富士松	下31							
5 附子	中22	非類図						
6 文相撲	上45	非類図			類図		類図	
7 布施無経	中8							
8 二人大名	中51							
9 二人袴	上9							

10 仏師	下 19						
11 舟渡髻	上 32				類図		類図
12 舟ふな	下 30						
13 文山立	下 4						
14 文蔵	中 16						
ほ							
1 法師が母	中 39				類図(逆)		類図
2 棒縛	下 34	類図					
3 包丁髻	上 4				(類図ガ 水掛髻 ニアリ)		
4 骨皮	下 13						
5 盆山	下 15				類図		
ま							
1 枕物狂	中 38		(法師ガ母 図ガ誤入)				
2 〈松ゆずりは〉					松ゆず りは		
み							
1 水掛髻	上 20	類図			(同図ガ 包丁髻 ニアリ)		
2 水汲(別名 お茶の水)	下 18					類図	
む							
1 胸突	下 46						
め							
1 目近米骨	上 14						
も							
1 餅酒	上 27						
や							
1 八尾	中 26						
2 八幡の前	上 11				類図		類図(小異)
ゆ							
1 祐善	上 50				類図		類図(小異)
よ							
1 横座	下 44						
2 米市	中 41						

(62)

3 鎧腹巻	上23						
ら							
1 楽阿弥	上43						
れ							
1 連歌盗人	中9						
ろ							
1 老武者	中49						
2 呂蓮	中17						
★曲名不明曲							
1 知不申候	下50			(同図ガ 口真似 ニアリ)		(同図 ガ曲名 ナシデ アリ)	
2 知不申候	下38				類図		

注：「伊文字」のみ『狂言集成』になく『狂言三百番集』上にあるが一図のみなのでこの欄に収める。

- 凡例 1. 曲名は「山脇流」の付箋に記入された曲名を五十音順に並べた。「山脇流」に無く他本にあるものは〈 〉で曲名を記し、その所収本の欄に同じく〈 〉で曲名を記入した。
2. 「山脇流」の欄には狂言図の所収位置を記した。「山脇流」は上・中・下の三冊の画帖であるので、上1とあれば上巻の1にあるということである。
 3. 類図とあるのは「山脇流」と同類の図がその本にあるということである。同類といっても若干の相違点を含む場合もある。
 4. 非類図とあるのは「山脇流」と同じ図柄ではない別の図がその本にあるということである。同じ場面ながら違う絵柄の場合と、違う場面を描く場合とがある。
 5. この表は近世前期の狂言の演出資料として狂言古図を検索するときの便宜を考えて作成した。現在知り得る狂言古図の「有力な一群」のすべての曲名をこの表から検索できる。

Collection and Research of Kyogen Illustrations V

Michiko Fujioka

This is the fifth continuation of the “Collection and Research of Kyogen Illustrations”, printed in *the Bulletin of the Institute of Oriental Philosophy*.

In this article, Kyogen Illustrations of superior quality, drawn in the early Edo period (17c), are collected and researched, to throw light on the unknown acting of Kyogen, Japanese classical comedy. Through this research, illustrations also are being recognized as useful historical materials, and several hidden parts of old Kyogen are gradually unveiled.

This research is furthered by Grants-in-Aid for Scientific Research. JSPS KAKENHI Grant Number 23652056